

記念館
ニュース平成二十一年度
特別展報告

十一月十一日(水)～十二月二十一日(日)まで、特別展「芸術院会員の歌人たち～佐佐木信綱から幸綱まで」を開催しました。

信綱は昭和十二年に歌人として初めて芸術院会員に選ばれ、令孫の幸綱先生は平成二十年に同じく芸術院会員に選出されました。これらのことを受けまして、今回の特別展では、芸術院会員に名を連ねた歌人たちを紹介しました。

芸術院会員の、特に「詩歌」部門に選出された人々の中で、歌人として名を成した人々は二十一名(十一月現在)います。さらにこの中から選出年代別に、I「創設時～昭和十一年代」：信綱・斎藤茂吉・窪田空穂、II「昭和二十～四十年代」：吉井勇・川田順、III「昭和五十～平成二十一年」：前川佐美雄・馬場あき子・幸綱先生の八人の歌人たちを取り上げ、各々の歌集・自筆等の資料や



おもな新資料の紹介

平成二十一年十月、鈴鹿市在住の井上孝子様から、豈園に弘綱が贊を記した掛軸をご寄贈賜りました。

さゝらな瀬 よする水際の 竹柏園の あるし

ほたるもあたり

はなれさりけり

弘綱の贊は流麗な筆跡で、私たちを惹きつけます。「さゝらな瀬」とは



信綱一首24
まりが野に遊びし童今し斯く
翁さびて来つ野の草は知るや
『山と水と』所収、昭和二十六年刊

子どものころ、このまりが野（鈴鹿市石薬師町地内・鞠鹿野）によくあそびにきたものだ。今、このように年老いてやつてきた私をあの時の子どもであると、この野の草は知っているだろうか。「信綱かるた」より
昭和二十五年作歌。最後の故郷訪問で詠んだ「鈴鹿行」の中の一首。

信綱・幸綱先生との交流の一端がうかがえる資料を交えて展示しました。

また、美術・音楽部門で選出された芸術院会員の中にも歌人として知られた人々がおり、この中から尾上柴舟・橋糸重を含む四人を、IV「詩歌」部門以外の歌人たちとして取り上げ、歌集や詠草等を展示しました。

このたびの特別展では、「芸術院会員任命書」や「紫綬褒章」等の幸綱先生所蔵の貴重な資料をはじめ、関係の方々及び各機関から大切な資料をお貸しいただくとともに、多くの教示を賜りました。深謝申し上げます。

なお、特別展の内容をまとめました。図録を刊行しました。

三重県亀山市出身のピアニストで、弘綱（信綱父）・信綱に師事し、竹柏会の女流歌人の一人に挙げられる人物です。多くの詠歌や文章を残し、その才を認められていましたが、歌集を編むことがなかつたため、よく知られていませんでした。

阪本氏は散逸していた多くの文献から糸重の歌や文章を拾い集められ、さらに現東京芸術大学教授時代の糸重の資料等も収集され、一冊の本にまとめられました。また、詳細な糸重の出自や年譜類も、阪本氏によって参考資料として付されています。

この一冊を見れば、糸重の人と作品の全容がわかるといえます。今まで埋もれていた女流歌人・橋糸重の研究が、今後ますます盛んになることを期待します。

する佐々木家の土蔵のことを指しました。土蔵は信綱一家が明治十年に石薬師を離れた後もこの地に残され、修理され、小学校の生徒らが読むのに適した本や信綱の蔵書中から贈られた書物などを収める「文庫」として使われるようになりました。

「閲覧所」は、新たに文庫の側に設けられました。現街道沿いの石薬師小学校と信綱生家の間にある、赤い屋根の家紋（四つ目結）入りの平屋のことです。現在では、書架が設置され、鈴鹿市の図書館の本が配架されています。

この文庫の書架の一角を借りまして、竹柏会門人や現在ご活躍されている歌人の歌集・歌論集等を百二十冊配架しましたので、ご覧いただければ幸いです。

石薬師文庫内に
寄贈書籍の一部を配架

十ー月十四日(土)午後一時半から鈴鹿市・佐佐木信綱顕彰会主催の講演会が開催されました。

当館学芸員による「特別展の解説」と阪本幸男氏（元鳥羽商船高等専門学校教授）による「橋糸重の人と作品」の演題で行われました。

阪本氏はご編著の『橋糸重歌文集』（短歌新聞社 平成二十一年刊）をもとに、糸重の経歴や歌風についてよく説いています。

橋糸重（明治六～昭和十四年）は、昭和七年に信綱が

還暦記念として村人に贈つたいわゆる図書館です。

当時の石薬師文庫は、「石薬師文庫（書庫）」と「閲覧所」から成り立っていました。

「石薬師文庫（書庫）」は、現存

信綱十一歳の短冊 展示室
だより

信綱十一歳の短冊

常時、信綱の幼少時（六～十三歳まで）の短冊を四、五枚展示していますが、その中から十一歳の信綱短冊を一枚紹介します。

石薬師文庫は、昭和七年に信綱が

還暦記念として村人に贈つたいわゆる図書館です。

当時の石薬師文庫は、「石薬師文庫（書庫）」と「閲覧所」から成り立っていました。

「石薬師文庫（書庫）」は、現存

このほか、弘綱短冊、信綱扇面・

掛軸、書籍をご寄贈賜りました。

この掛軸は、画贊とともに見事な一品です。五月頃の展示を予定しています。

厚くお礼申し上げます。

信綱歌の四句目「竹のその生」には、「竹の園、竹の植わった庭園」の意と、中国の故事から「皇族」を指す意の掛け詞が使われています。この信綱の巧みな歌の詠みぶりには感心させられます。一方、父弘綱ゆずりの字の上手さにも驚かされます。信綱五歳からはじめられたという、弘綱の英才教育の跡がうかがえます。

また、弘綱の「明治十五年七月六日」付の日記には、「信綱、正風先生に隨ひ、有栖川宮へはしめて参殿」、「信綱、有栖川宮へめざる」とあり、そのうえ信綱が「扇二握 大紙三束」を拝領したと記されています。

「正風先生」とは、高崎正風（歌人、御歌所長など歴任）のことです。正風は特別に有栖川宮家の女官らに歌の指導をしており、そのことを知った弘綱は正風を説き伏せ、信綱十一歳の夏より師事させています。

こういったことを考え合わせると、おそらくこの時に有栖川宮夫人に信綱は正風を説き伏せ、信綱十一歳の夏よ

り師事させています。

こういったことを考え合わせると、おそらくこの時に有栖川宮夫人に信綱は正風を説き伏せ、信綱十一歳の夏よ

り師事させています。